

平成26年度 特定非営利活動法人和歌山eかんぱにい総会記念講演レポート

「自分らしく生きる～信じた道の先に～」

講師：真道 ゴーさん（プロボクサー、第5代WBC女子フライ級世界チャンピオン）

6月8日（日） りいぶる会議室A 13:30～15:00

5月25日に二度目の防衛を勝ち取ったばかりの真道さんをお迎えして、現在に至るまで、そしてこれからの「真道ゴー」としての思いをお話いただきました。

真道さんは、「子どもの頃からスカートが嫌いで男の子とばかり遊んでいた。中学生の頃に友人同士で恋愛話が出て、自分は男性にそういう感情を持つことはなかった」と語り始めました。「自分は人とは違う」という違和感を抱いたまま、高校、大学とバスケットに打ち込んだ生活でした。その頃はまだ社会のなかで、「性同一性障害」という言葉もほとんど認識されておらず、真道さん自身、その違和感が何であるのか全く分からないまま周囲にも言えずに過ごしていました。しかし、大学時代に女性と付き合っていることが周囲に知られ、同性を好きになることを快く思わない部活仲間から幾度となくいじめを受け、自分は一体何者なのか、この先生きていて幸せなのかと葛藤し、死を考えるほど苦しんだと打ち明けられました。

その後、ネットで「性同一性障害」という言葉を知り、初めて「自分はそうだったんだ」と自分の状態を理解することができたと言われました。最終的に大学をやめ、バーで働いていたときに知り合った人から、「自分から逃げてはいけません。きちんと自分と向き合うべき」と諭され、20歳のとき家族に打ち明けました。親と決別する覚悟で話すと、母から「今まであなたにそうではないかと話そうと思いつつ、向き合えなかったことを許してほしい。私は、あなたが笑顔でいてくれることが幸せ。この先他の人より大変なことがあるかもしれないけど、大変なことは人を不幸にはしない、土台になる。やりがいのあるものを見つけて生きてほしい」と言われ、前を向いて自分らしく生きていこうと思える大きな力になったと言われました。

そして、子どもの頃の夢であったレスキュー隊員をめざし体を鍛え直そうと、2008年、初めてボクシングジムを訪れ、一瞬でボクシングに引きこまれトレーニングに通うことに。ちょうど日本プロボクシング界において女子の参加が可能になった年で、ジムのオーナーからプロボクサーへの道を勧められました。子どもの頃に事故で足の靭帯を損傷しているため母には反対されましたが、父からの「仕事はいつでもできる。今やれることをやれ」との言葉で決断。ボクシングを始めて5か月で地元和歌山でのデビュー戦に挑みました。結果は判定負けだったものの、観客から「前に行く姿に感動した」と言われ、「自分でも人に喜んでもらうことができた。頑張ってきて良かった」と、この時から「プロボクサー真道ゴー」の挑戦が始まりました。

ボクサーとして3年ほど経った頃、やりがいを感じる一方で、心の性は男性であるのに「女子」の枠組みで闘う現実との違和感からの強い葛藤のなか、引退も考えるようになったそうです。そんな時、パートナーの「私は、男とか女とかではなく、『あなた』だから好きになった。一番性別にこだわってるのはゴーさんでは？ 一度めざした道をあきらめないで」との言葉に吹っ切れ、

「今の世界で頂点を極めよう、『女で敵なし』、そうなったとき『男』になろう」と決意したと話されました。また、女子プロボクシングはまだ歴史が浅いため、男子と比べられることも多く、もっと女性のプロ選手が増えて盛り上げていくことも必要であり、そのために、自分が世界で強いといわれる選手と闘い勝利していくことで一助になれば、と思われたそうです。世界チャンピオンは自分の「夢」ではなく、実現できることの「第一歩」。頂点を勝ち取ったあとは、「男性」として生きていきたいと話されました。

今回の防衛戦のとき、ずっと交際に反対していたパートナーの母親から「ゴーさんと出会ったおかげで、娘がすごく頑張っている姿を見ることができた。とても誇りに思っている。ありがとう」と言ってくれたことが一番嬉しかったと話されました。「今まで人を好きになっても、最終的には相手から『この先一緒にいても幸せになれないから別れたい』と別れを告げられ、自分も相手に辛い思いをさせてしまうばかりの関係が苦しく、人を信じることもできなくなっていた。でも、彼女は『親に反対されてもあなたと生きていく』と何があっても変わらなかった。前を向いて頑張ってきたことが報われた」と思いも新たに、挑戦を続けていくと話されました。

後半のトークタイムでは、チャンピオンベルトを披露してくださり、リングネーム「真道ゴー」の由来について紹介。「真道」は、両親が「まっすぐに信じた道を突き進む」という思いを込めて名付けてくれたこと、「ゴー」は自らが「行くしかない！」という決意から決めたと紹介されました。そして、これまでを振り返り「家族に打ち明けたとき、ありのままの自分を受け入れてくれた。父親とは直接このことについて話したことはないが、いつも黙って見守ってくれている。家族や周囲の支えはすごく大きい」と話されました。そして、性別違和※（性同一性障害）の人や性的少数者に対して日本の法律はまだ不十分なところが多いので、もっと生きやすい社会にするための活動にも取り組んでいこうと考えていると話されました。現在運営しているスポーツジムでも、姉やパートナーとともに、発達障害の子どもたちに、障害がありながらも運動の楽しさや自信を持てる喜びなどを感じてもらい、生きていくことへの希望になればという思いから活動されています。

講演終了後は、時間を延長して参加者一人ひとりと言葉をかわしながら、サインや記念撮影に応じてくれました。参加者のアンケートからは「本当に勇気をもらえる話でした。ゴーさんの話を聞いていて、生きるのは“男”“女”関係なく“人間”として自分らしく生きるのだとあらためて思いました。今日はいいお話をありがとうございました」「自分で自分を受け入れること、環境やまわりのせいにしてしまわずに今の自分を大切に生きること。『ボクシングを通して、周りの人たちを幸せにできた』というお言葉、自分の胸にきざんでおきたいと思います」などの感想が寄せられました。講演の前後には、真道さんの生い立ちや試合の様子などを収めたDVDを上映し、参加者は熱心に見入っていました。

講演を通して、性的少数者への正しい理解と、性別にとらわれることなく自分らしく生きることの大切さに気づける機会となりました。真道さんと同様に、「誰にも言えない」「自分がおかしい」といったネガティブな気持ちを抱いている人もいます。真道さんも、「カミングアウトをする、しないの選択をするのは自由だけど、言いたいのに言えないことが一番辛い」と話

されました。

参加者には、「チーム紀伊水道」のリーフレットも配布しました。「チーム紀伊水道」は、和歌山市で活動する性的少数者とその理解者のために活動されているグループです。活動内容は、8月発行の情報誌「りいぶる」に掲載し、その後“りいぶる”HP「モデル事例集」にもアップされる予定です。現在、日本での性的少数者は人口の約5%、20人に1人（※2012年の電通総研、ネット調査による）といわれており、クラスに1～2人はいる計算になります。そう考えると、とても身近な存在であり、それだけに社会のなかで生きづらい現状にあることに胸が痛みます。多様な生き方があり、それがあたり前だということを早い年代から認識できる社会の実現が必須だと痛感しました。

真道さんは、11月15日（土）に開催される、“りいぶるフェスタ”でも講演されます。また、指名試合も決定されたそうです。これからも、彼の挑戦を応援していきたいものです。その輪が広がることで性的少数者が“マイノリティ”ではなくなることを願っています。

※講演のなかで、「性同一性障害」という呼称が今後、「性別違和」に変更されていく流れがあり、今回も「性別違和」という表現を使います、と話されました。

5月28日、日本精神神経学会が精神疾患の病名の新しい指針を公表、「学習障害」を「学習症」、「パニック障害」を「パニック症」など、差別意識や不快感を生まないような用語に統一し、変更していくとのことです。「性同一性障害」も同じような観点から、「性別違和」に統一し変更されていきます。